和算研究所だより

第10号 Vol. 6 No. 1 2002年9月25日

発行：和算研究所
和算研究所
〒114-0005
東京都北区栄町48-23
東書文庫内

国際会議と和算

竹之内　脩
和算研究所副理事長

今年は、国際数学者会議ICM2002が中国北京で開催され、それに関連して、多くの国際会議がもたれた。数学史にかかわるものでは、次のものがあった。

○　第3回　情報化時代における数学教育と数学の文化史（京都）

○　第5回　漢字文化圏および近隣諸国における数学史・数学教育国際シンポジューム（中国天津）

○　Internationl Colloquium on the History of Mathematics（中国西安）

○　ICM2002分科会19　数学史（中国北京）

それぞれの国際会議において日本からも、多くの人が参加して発表を行ったが、筆者が注目していたのは、外国の研究者がどれだけ和算について関心を持ち、発表をしてくれるかということであった。しかし、これについては、多くを見ることはできず、中国の研究者から梅文鼎の数学が建部賢弘に与えた影響や松永良弼の級数論などについて僅かに触れられた程度であった。もっとわれわれは多くの情報を発信せねばならないとつくづく思わされた。

個人的にはいろいろな話をした。算額の研究に熱心な人もいて、日本人がどれだけそのようなものに関心をもっているか、と聞かれて、これまた返答に窮したことである。

そのほか、二、三のわれわれが取り組むべき課題として考えされたものに、次のことがある。

＊　和算書の書名の英語訳がほしい

中国の算書は、統一した英訳がある。日本でも早くそのようなものをつくるべきである。

＊　建部賢弘の綴術算経の英訳がほしい

これは、森本氏が取り組んでおられるので、そのうち完成されることと思われる。しかし和算書の翻訳は、ぜひやっていかなければならない。

□第10号目次□

国際会議と和算
竹之内脩……1

特集：各地の和算研究会
岩手県和算研究会
安富有恒……2
群馬県和算研究会
大竹茂雄……2
神奈川県和算研究会
嵐　敏夫……3
「近畿和算ゼミナール」
田村三郎……4
岡山県和算研究会
河本知徳……5

各地の和算だより……6
5th ISHMEが天津で開催された／第9回関東甲信越静和算研究会・山梨大会／愛媛和算研究会／大阪生國魂神社で算額奉納／長野県で新算額／兵庫県で新算額／新刊書紹介

＊和算研究所ニュース…7
第5回『和算にまなぶ』のイベントを開催／和算研究所理事会／第6回『算額をつくろう』コンクール応募を開始／好評の和算研究所発行図書

2001年度決算報告……8
編集後記……8

WASAN Institute
和算研究所のシンボルマーク

各地の和算研究会

岩手県和算研究会

安富　有恒

岩手県和算研究会は平成6年4月に会員数25名で発足しました。今年で9年目になります。年間の事業は、総会、研修会、調査研究、会報の発行、「現存算額探訪」を年2回発行、東北地区和算研究交流会への参加、以上6つを基本に実施しております。

総会は年1回、6月中旬に盛岡か一関で開催しています。研修会は年2回実施。第1回は総会終了後、研究発表と和算講演会を行い、第2回は秋に算額見学会と講演会を開催しております。秋の和算講演会は県内各地で毎年場所を変えて、地元の教育委員会と共催事業として実施しております。したがって地元の一般の方々も多くききにきてくれます。調査研究事業は、県内各地の和算書や和算に関係する資料を調査研究しています。今まで15箇所以上調査が行われました。会報は年3回発行しています。内容は総会決定事項や研究発表の要旨、和算講演会の要約、算額見学会の報告、和算資料調査報告等です。「現存算額探訪」は年2回発行しています。内容は岩手県の現存算額を算額見学会にあわせて、問題の現代語訳や解説、解答などをとり入れたものです。東北地区和算研究交流会は毎年、山形、福島、岩手の順に持ちまわりで行われておりますが、これに出来るだけ多くの会員が参加し、研究発表をし、交流をはかることにしております。

平成13年度第2回研修会（算額見学会）での会員および一般参加者

平成14年3月現在、会員数は58名と増えましたが、高校の数学教員が多いので、クラブ活動の指導等で多忙なため研究発表や調査事業に協力できる会員が少ないのが悩みの種です。そのため長期休暇中に調査などを実施したりしております。

最後に本研究会の組織と連絡先を記します。代表者は安富有恒会長、明日守（みょうが）、山田預喜（まさき）副会長、事務局は事務局長、庶務2名、普及活動、会計の計5名、監事2名、連絡先は事務局長鈴木幸彦（盛岡市中堤町34−35、電019-647-0606）です。

群馬県和算研究会

大竹　茂雄

群馬県和算研究会は昭和44年（1969）11月に発足し、33年の歩みを続けてきた。当時、地方における和算を主とする研究会は日本数学史学会近畿支部があったのみで、県単位の和算研究会は皆無であった。その後、各県に研究会が発足して現在では十に達するほどになったが、本会はその先頭を切ったことになる。

本会は発足時より研究会を、春、夏（総会を兼ねる）、秋の年3回開催し、主に県内の算額調査と和算家事績の探蹟を行った。その成果の一部は、会員各自が手書きした孔版刷を含む「算額集」5冊にまとめられ、それを集大成した『群馬の算額』

各地の和算研究会

を昭和62年に刊行した。なお、現在「算額の解法集」を編集中で出版する予定である。また、『会報』は最初は孔版刷で年2・3回発行したが、その後年1回となり本年37号を発行した。

さて、創立数年後には対外的な行事を主催もしくは共催するようになり、やがて中国の数学史研究者との交流を行うようになった。

次に、本会が主催した主な行事を年代順に記してみる。

1975年　関流八伝中曽根宗邡歿後70年記念顕彰講演会
1978年　関孝和270年祭記念和算講演会
1981年　関流六伝小野栄重没後150年祭
1986年　日中数学史シンポジウム訪中旅行
1987年　漢字文化圏と近隣諸国の数学史・数学教育国際シンポジウム(以下ISHMEと略記)、群馬大学工学部
1991年　戴震記念国際会議参加訪中旅行
1992年　第2回ISHME参加訪中旅行
1995年　第2回関東甲信越和算研究交流会
1996年　第3回ISHME参加訪中旅行
1998年　関孝和290年祭記念・算額題コンクールおよび講演会
1999年　第4回ISHME、前橋工科大学
2000年　第7回関東甲信越静和算研究大会
2002年　第5回ISHME参加訪中旅行

創立時の会員は20名たらずであったが、ここ10数年間は50名前後になっている。しかし、会員の年齢構成は国の人口のそれに準じてきており、今後の活動が必ずしも順風満帆でいくか懸念されている。

神奈川県和算研究会

神奈川県和算研究会会長　嵐　敏夫

当研究会が発足したのは平成4年12月。故下平一夫博士の肝煎りで天野宏氏が呼びかけ、野口泰助氏・柴原英雄氏・加藤芳信氏・及川正巳氏・小野雄司氏・川瀬正臣氏らが中心となって同志を募り、スタートした。

メンバーは多彩で和算研究家・数学教師・珠算専門家・郷土史研究家などで構成され、現在28名が登録している。

会長は初代岩楯幸雄、2代天野宏を経て、現在は3代目嵐敏夫が平成10年から就任している。

スタート時点では主として、県内・県外の算額や算子塚の見学と会員の研究成果の発表であったが、現在では年3回の勉強会のほか、一泊研修会・日帰り研修会などを定期的に催している。

また、機関誌『和算かながわ』を年2回定期的に発行しているが、増刊号も年1～2回配布している。

当県が当番となった関東甲信越静和算研究大会も初回が小田原、2度目は藤野町で行い、和算家神原一学の許状や算書を展示し、町のPRに貢献したが、本年度は展示会を小田原で、また、来年度以降は県内各地で催し、和算を多くの方々に理解していただくような計画を念頭においている。

役員構成は以下の通りである。

【顧　　問】野口泰助・岩楯幸雄・天野　宏
【会　　長】嵐　敏夫

平成14年度総会（旭丘高等学校図書室）

各地の和算研究会

【副 会 長】及川正巳
【運営委員長】川瀬正臣
【運営委員】（事務）川瀬正臣
（会計）及川正巳
（企画）柴原英雄・加藤芳信・
志村　聡・小野雄司
【幹　　事】桜井孝三・佐久間正之

また事務局は
〒250−0014　小田原市城内1−13
旭丘高等学校内
神奈川県和算研究会事務局
川瀬正臣
TEL 0465−24−2227；FAX 0465−22−0216
である。

「近畿和算ゼミナール」紹介

田村　三郎

この近畿和算ゼミナールは1991年秋、故宮本良雄先生の発議によって出発した。当時平山諦博士が、和算成立はキリシタンの影響であるとの説を発表され注目されていた。この説は全くの新説とはいえないと思うが、平山博士ほどの和算研究の大家が言われるとその影響は大きい。宮本先生は和算誕生に関する平山仮説を検討する場として「和算ゼミナール」を作ってはどうかと提案された。それに賛同したメンバー7名が、1991年9月27日台風襲来のさ中、大阪産業大学の私の研究室に集合した。

この打ち合わせ会で話し合われたことは、会の名を「和算ゼミナール」とするが、和算のみならず中国やインドおよびヨーロッパの数学史全般に中学や高校の先生もいて、日曜日以外会を開くことはできない。ところが日曜日、大学の部屋を借用する許可が出ないことが判明したのであった。やむを得ず有料の市民会館などを借りることにして発足したのである。ところが第4回目の会合から宮本先生とご縁のあった故堀岡先生を記念して建てられた「堀岡記念館」を無料でお借りすることになり、それ以降108回の研究会を開くことができた。

ここでの話題の中心は日本と中国の数学であるが、特に和算誕生と結びついて円周率やキリシタン問題、吉田・角倉家などが印象に残る。その他の発表内容は奈良・平安峠代のものから江戸時代さらに明治に入ってからの数学なども取り扱われ

各地の和算研究会

岡山県和算研究会

河本　知徳

岡山県の和算研究は、岸加四郎氏、宮本良雄氏、山川芳一氏、藤井貞雄氏などの先達によって誕生した山陽和算研究会を中心に研究が続けられて来ました。そのお陰で県内の算額も26面発見されており、基礎資料として山川芳一氏の『岡山県の算額』があります。

岡山県和算研究会は山陽和算研究会の解散した後、そのメンバーを母体に平成10年7月26日に発足しました。それに先立つこと1年前の平成9年11月8日から月1回のペースで有志が和算の勉強会を開いていました。講師に藤井貞雄氏を招き、備中の和算家藤田秀斎の『算法適等詳解』の読解を中心に、和算の入門講座として勉強を始めたわけです。

現在研究会の会員は15名ですが、毎月1回の例会には10名前後が参加します。会員は少ないですが、それぞれがユニークな経歴の持ち主で各会員が持っている人脈はかなり広いものがあります。そのお陰で算額や算木が最近発見されたり、古文書が出てきたりと少しですが成果があがっています。またほぼ月1回のペースで例会を開いているのが自慢です。

例会では毎回共通テーマでの学習と各自が持ち寄った1か月間の研究成果の発表とがあります。共通テーマの学習は、現在は藤田秀斎の師の小野以正の『啓迪算法指南』を読んでいます。会員の河田良人氏が、毎回数頁ずつの現代語訳と数学的解釈をまとめてきて、その検討をみんなでしています。原文に直接触れることができ変体仮名の勉強にもなります。また、このような定番の学習とは別に、各自がそれぞれに取り組んでいる研究について自由討議をします。話は時に脱線して和算家の話や資料収集の方法やら、はたまた教育談義、

算額発見―岡山市幸島稲神社にて―

数学教育の古今東西など蘊蓄を披露され大変勉強になります。午後1時過ぎから始めた会が毎回5時頃まで延々と続きます。参加者の中には70歳を過ぎた人、遠く奈良から参加する人などがいて、その情熱には感服します。

また単なるマニアの会で終わってはいけないと、会長の船倉武夫氏の尽力で学会に参加したり、文化講座などを開いて外に向かっても情報発信をしています。今までに企画した会は

① 「伊能忠敬岡山を歩く」(平成13年7月28日)
　岡山市オリエント美術館

② 「数学で江戸散歩」(平成11年12月5日)
　岡山市オリエント美術館

などがあります。いずれも多くの一般の方の参加がありました。また岡山県立博物館で博物館所蔵の算額や小野以正の肖像画、古川古松軒の地図などを展示した一般の方への講座も開きました。このような企画を通して和算の「存在」が一人でも多くの方に伝わり、そしてこの地方の和算研究の輪がさらに広がることを目指して、これからも活動を続けていきます。

各地の和算だより

□5th ISHME が天津で開催された

2002年8月8日～12日に第5回漢字文化圏と近隣諸国の数学史・数学教育国際シンポジュウム（ISHME）が中国の天津で開催され，世界各地から研究者が集い、和算の研究発表も多数行われた。和算研究所からは副理事長の竹之内脩・道脇義正、評議員の大竹茂雄・小寺裕・小林龍彦が参加しプレゼンテーションを行った。

□愛媛和算研究会

第7回愛媛和算研究会が2002年8月24日に開催され、香川県の算額見学を中心に丸亀市立資料館で研究発表などがあった。

□第9回関東甲信越静和算研究大会・山梨大会

平成14年9月8日～9日に山梨県郷土数学研究会主催（日本数学史学会、山梨県数学教育連合会後援）による和算研究大会が石和観光温泉ホテル「慶山」で開催された。初日は6人の研究発表の他、古そろばん・算額等の展示物の見学をした。翌日は、マイクロバスで徳榮山妙法寺の算額・山梨中央銀行の金融資料館の見学会が行われた。妙法寺の算額や妙法寺については、「だより No. 5」のなかの中山政三先生の文章を参照。また、金融資料館では江戸時代の小判をはじめ、武田氏時代の貨幣や千両箱の重さの実体験など貴重な体験ができた。二日間を通じ50人以上の参加者がおり盛況であった。山梨県郷土数学研究会の諸氏に敬意を表したい。

大会であいさつする中山会長

最近、浄財によって再建された徳榮山妙法寺本堂

□大阪生國魂神社で算額奉納

2002年7月21日大阪市天王寺区の生國魂神社に元文4年山口幸治郎奉納の算額が復元された。奉納願主は南大江尋常高等小学校昭和14年3月卒業悠久会で、近畿数学史学会が奉賛企画。

□長野県で新算額

長野県下高井郡の満昌院で今年2月に長野県和算研究会によって新たな算額が確認された。
大きさは40cm ×49cmで容術2問、嘉永5年正月當所月岡氏奉納
詳細は「長野県和算研究会会報」No. 11（2002年4月16日発行）にある。

□兵庫県で新算額

兵庫県太子町の石海神社で新宮町教育委員会により今年3月に新たな算額が確認された。
問題は1問で天保15年蓮常寺村吉村幾之尉門人同村九尾周之輔奉納
詳細は「和算」第95号2002年6月近畿数学史学会発行にある。

新刊書紹介

□米光　丁著『江戸初期の課題数学入門（遺題解と現代解の比較）』自費出版
本書は「塵劫記」や「参両録」「改算記」の遺題を解説したもの。
代金1000円（送料310円）にて頒布。
申し込み先
856−0827　長崎県大村市水主町1丁目978−90
米光　丁
hinotoyonemitsu@hotmail.com
TEL&FAX：0957−54−4507
なお下記サイトからも注文できる。
http://www.wasan.jp/kadaiorder.html

□佐藤健一・大竹茂雄・小寺　裕・牧野正博著『和算史年表』　東洋書店　2002年6月発行　1600円

□伊達宗行著　『『数』の日本史』　日本経済新聞社　2002年6月発行　1800円

□伊藤信夫著　『算学者伊藤佐一親子とドクトル・ヘボンの交遊譚話』　新読書社　2002年3月発行　2700円

□佐藤健一・伊藤洋美・牧下英世著　『算額道場』研成社　2002年7月発行　2000円

＊和算研究所ニュース＊

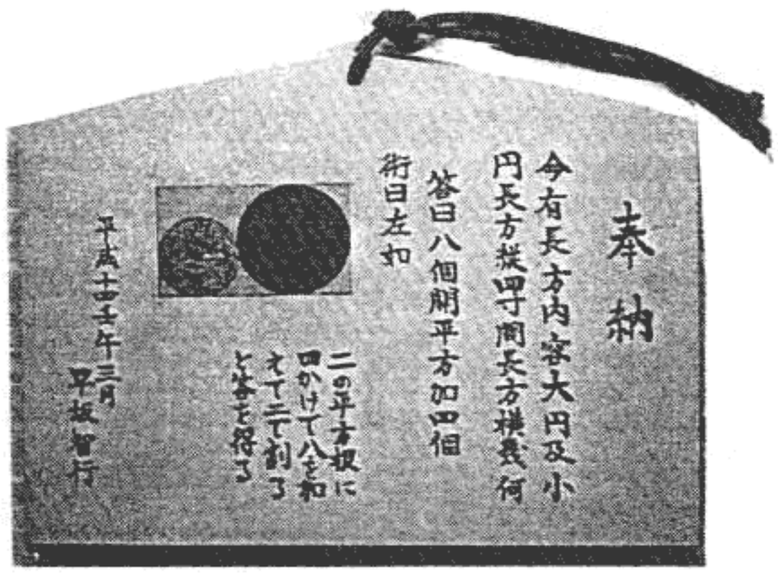
第5回『和算にまなぶ』のイベントを開催

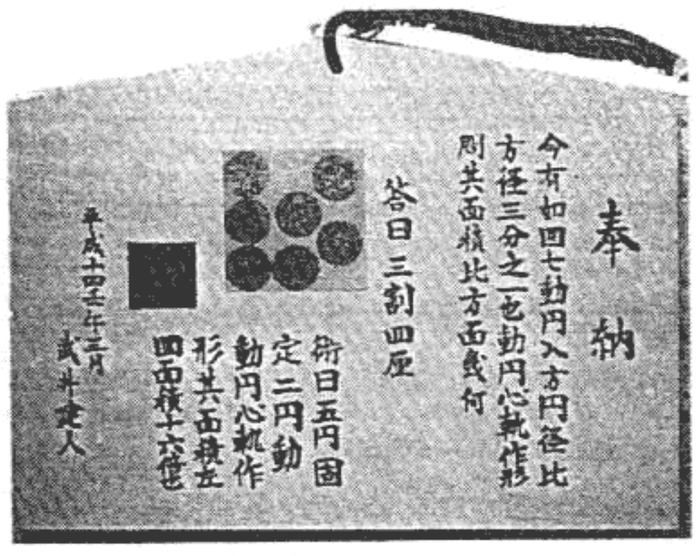
本年3月23日に和算研究所の恒例のイベントが江戸東京博物館で開催されました。今年は都合でいつもの会議室が使用できず学習室での開催となったが、例年どおり多くの方が参加された。イベントの諸行事の前に「第5回算額をつくろう」コンクールで金賞・銀賞者の表彰式が行われました。年々レベルも上がり専門家が感心する作品も見られます。

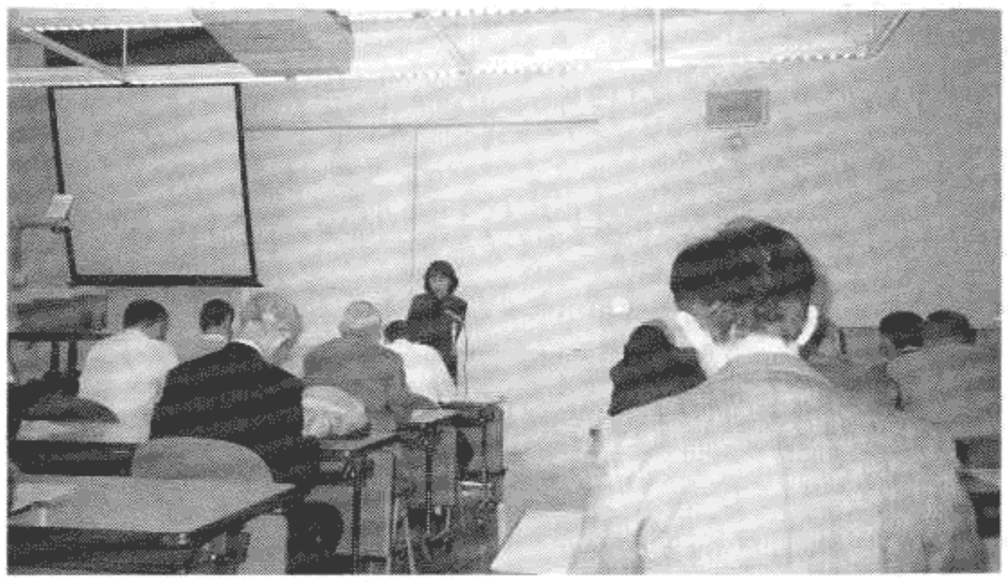
金賞者は、次のとおり。下に金賞作品のいくつかを掲載しておきますので、次回の参考にして下さい。

《第5回の金賞者》五十音順

鈴木龍詩（ちはら台南中学校）
下山菜々子（ちはら台南中学校）
武井建人（桐蔭学園）
永井暁彦（筑波大学付属駒場中学校）
早坂智行（筑波大学付属駒場中学校）







引き続き講演が行われ、多くの方が最後まで熱心に聴講しておりました。

和算研究所理事会

7月13日午後2時より理事会が開催されました。平成13年度の事業・決算について事務局より報告あり、質疑応答の後大筋で承認されました。

また、この4月より東書文庫に和算研究所の蔵書が移り、会員の方々をはじめ広く和算に興味のある方に資料閲覧のサービスをはじめるため、人材確保等が理事長から提案され、これも了承されました。

その他、今後、和算研究所として成すべきことも話題になりました。会員各位の案をお待ちいたします。

第6回『算額をつくろう』コンクール応募を開始

今年も中学・高校の人などを対象に、独自の発想で算額をつくって応募していただくことをはじめました。問題の題材は自由です。B4判大の用紙に自分なりの考えで算額をつくってご提出下さい。

申込み・問い合わせ先：

〒150−0011　東京都渋谷区東1−1−11
実践女子学園中学校・高等学校　数学科
佐藤先生
e-mail：sangakuwotsukuro@clubAA. com

なお、応募締切り日は、平成15年1月15日です。

好評の和算研究所発行図書

和算研究所では、多くの方々の要望のございました江戸時代の数学書のベストセラー『塵劫記』の英訳版と日本語現代訳版を同時発行しております。その内容のすばらしさから高い評価を受けております。制作にあたって、より完全を期すため、複数の原著を比較し検討しました。

まだ在庫がございますので、お求めの方は和算研究所へ郵便にてお申し込み下さい。

英訳版

『JINKOKI（塵劫記）』…原本影印付

B5判／定価［本体2900円十税5％］

日本語現代訳版

『塵劫記』…校注付

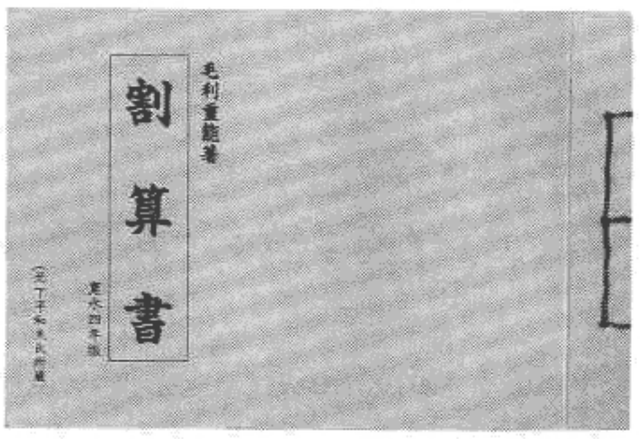
B5判／定価［本体2858円十税5％］

送料は390円

（なお、八重洲ブックセンター、ジュンク堂書店池袋本店・大宮店・大阪本店・福岡店には置いてあります）

『割算書』の簡易和とじ本

割算書の本文全ての影印を江戸風の和とじにした本。頒布価格1,500円



和算研究所2001年度会計報告

より分かり易くするため、記載方法を少し変え、基本財産と年度収支を分けました。ご了承下さい。

2002年3月31日現在（作成日：2002年8月31日）

この報告書は、安富、藤井両監査役の監査済みです。

《基本財産》

資産の部

定期預金	2,000,000
現金・預金*	1,408,860
英訳版『塵劫記』（633冊）	810,873
日本語現代訳版『塵劫記』（171冊）	219,051
資産合計	4,438,784

負債の部

財団設立預り金	4,380,650
発足の会経費（借入金）	758,399
欠損金（短期借入金にて充当）	−700,265
負債合計	4,438,784

《年度収支計算書》

収入の部

会費収入	1,081,000
図書売上（紀要2冊）	5,000
受取普通預金利息	120
受取定期利息	1,449
立替金（欠損金）	691,401
収入合計	1,778,970

支出の部

「和算研究所だより」8号、9号分	300,000
「紀要No. 4」	500,000
家賃	552,000
イベント費用	200,000
通信費	111,770
支払定期利息	2,311
振込手数料等	8,990
文具等	97,715
雑費	6,184
支出合計	1,778,970

＊印は『塵劫記』の売上代金、普通預金、郵便貯金残高、及び現金を基本財産に加算した額

なお、両『塵劫記』の原価単価を1冊1281円として

【編集後記】

お陰様で「和算研究所だより」も10号になりました。これも偏に皆様方のご協力の賜と感謝いたしております。和算研究所が念願の都区内（北区王子）に移って最初の号です。今回は、各地で独自の研究活動をされている5つの研究会の活動を紹介させていただきました。なかなかすばらしい活動をされていると、読者にも納得していただけると思います。また、別の号で他の研究会も紹介させていただきます。この「だより」につきましてご要望がございましたら、お気軽にご一報下さい。（T. W.）

編集・発行：和算研究所／無断転載厳禁／制作：研成社／印刷：春名製版印刷